Photography as a Turning Point of Visual Cultures and Technology

視覚文化論 I

ヴィジュアル・カルチャーとテクノロジー
その歴史と未来への旅

Introduction

深 川 雅 文
Masafumi Fukagawa

キュレーター/ クリティック
Curator / Critic

2019年　　写真発明180年　(1839年　写真の原型　ダゲレオタイプの発明)

静物　ダゲレオタイプ　1837年

発明者
ルイ・ジャック・マンデ・ダゲール
1787-1851 仏

1.本講座の目標　この講座がテーマとするもの、ことがらについて。
何を問いかけるか? どのようにして、何を手掛かりにして、問いかけるか?

「人間とは何か?」という問いから「写真とは何か?」という問いへ

写真を発明した「人間とは何か?」

「人間」を規定するものとは何か? → 様々な定義 → メディアを作って使う人間
Homo Medialis (ホモ・メディアーリス)

人間が生み出した基本的メディアは何か?→「言語的メディア」と「視覚的メディア」

●「視覚的メディア」が生み出した視覚文化(Visual Cultures)を手かがりにして「人間とは何か?」に迫る。

●視覚文化(Visual Cultures)の展開の中で写真を人類史上の大きな転換点と捉え、
その文化的衝撃と意義、可能性について、誕生前後から今日に至るまでを探求する。

視覚文化(Visual Cultures)の発展は技術(Technology)の展開と表裏一体にあり、この問いの実行は、
Visual Cultures&Technology への問いかけの中で遂行される。

人間とは何か? → 視覚文化と技術の展開 → 写真とは何か?

2.自己紹介

深川雅文　ふかがわ　まさふみ

インディペンデント・キュレーター/クリティック。九州大学文学部文学部哲学科卒業・同修士課程修了（西洋哲学史）。川崎市市民ミュージアム (以下 kcm) 在籍中、学芸員として写真、デザイン、現代美術に関する展覧会企画を行う。2017年からインディペンデントで活動。代表的展覧会:「バウハウス　芸術教育の革命と実験」(1994 kcm)、「現代写真の動向」(1995, 2001 kcm)、「遠・近　ベッヒャーの地平」（1996 kcm）、「バウハウスの写真」(1997 kcm)、「写真ゲーム」（2008 kcm）、「WA 現代日本のデザインと調和の精神」(2008 国際交流基金　共同キュレーション)、「生きるアート 折元立身」（2016 kcm）などがある。2017年からフリー。2019年のバウハウス100周年を祝うbauhaus100 japanプロジェクトを推進。巡回展「きたれ、バウハウス」の監修を行う。著書『光のプロジェクト ―写真、モダニズムを超えて―』（青弓社 2007）、訳書『写真の哲学のために』（ヴィレム・フルッサー著　勁草書房 1999）、編著『写真集　吉村朗』(大隅書店 2014)、共著『現代写真アート原論 《コンテンポラリーアートとしての写真》の進化形へ』(フィルムアート社 2019)など。

国際美術評論家連盟(日本支部)会員▶http://www.aicajapan.com/ja/memberprof/fukagawa-masafumi/ (写真入り)

公式ウェブサイト:Art & Article by Masafumi Fukagawa https://www.mfukagawa.com/　E-mail: mfukagawa@mac.com

3. 講義関連の書籍について

『現代写真アート原論　〈コンテンポラリーアートとしての写真〉の進化形へ』

後藤繁雄、港千尋、深川雅文＝編　発行: フィルムアート社　2019年03月26日

デジタル化以降、「真」を写す＝写真という従来の概念が大きな変化を見せるいま、現代アートとしての写真の新しい「原論」を提示する。

「銀板を用いた撮影法により写真が誕生してから180年――いまや誰もがスマートフォンで日常的に簡単に「撮影」でき、それを加工し、インスタグラムをはじめとするSNSで世界中に発信でき、インターネット上には無数の写真データが存在する時代となった。デジタル化し遍在化した「写真」には大きなパラダイムシフトが起こっている。

グローバル資本主義のなかで流動化するコンテンポラリーアートの世界でも、「写真アート」は存在感を増し、一点数億円で落札されるプリントからインスタレーションやプロジェクション、ポストメディウムの作家まで、新しく多様な才能が活躍している。コンピュータ・サイエンスやネット・テクノロジーの大きな変化に晒される社会で、いかに一枚の写真がアートとしての価値を生成するのか――本書は「現代写真アート」の世界をめぐる羅針盤となるだろう。」

『光のプロジェクト―写真、モダニズムを超えて』
著者: 深川雅文 発行: 青弓社 2007年6月21日

「写真とは何か?」―世界を覆い尽くす写真=テクノ画像にあらためてこの問いを突き付ける。アジェ、モホイ=ナジ、ベッヒャー夫妻、森山大道ら写真家と作品を俎上に載せ、そこに通底する光による革命の意志をあぶり出す写真論の臨界。」

「私たちの周囲にあふれる写真イメージ。「謎」に満ちた存在である写真とはいったい何なのか? アジェやモホイ=ナジ、森山大道などの伝説的な写真家と作品を考察し、彼らが「光のプロジェクト」を遂行する光の革命家であるとの結論を導き出す革新的な写真論。」

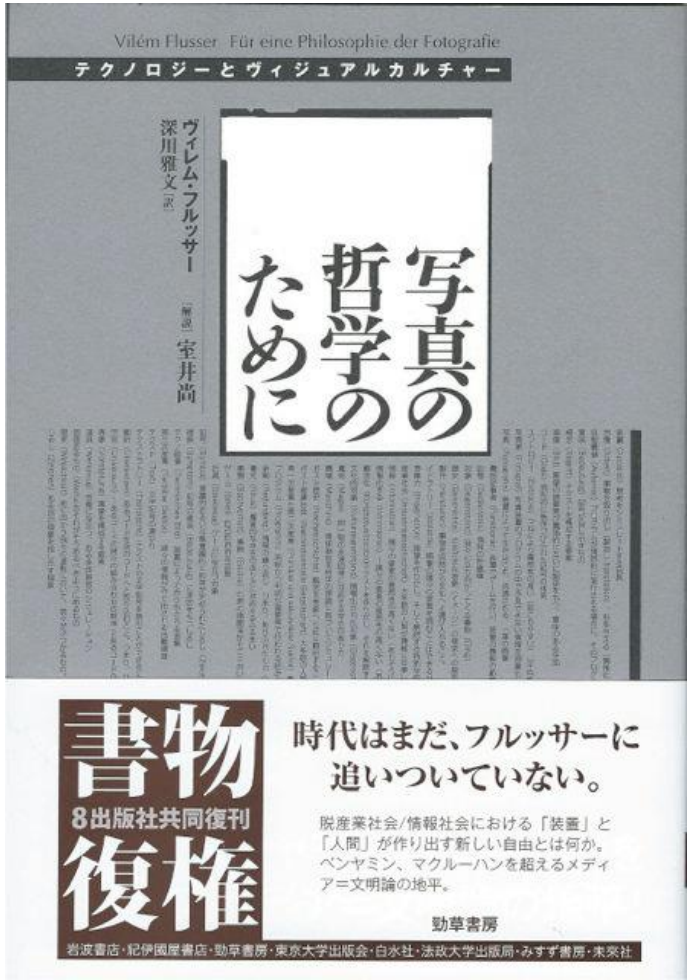
『写真の哲学のために』

ヴィレム・フルッサー著　深川雅文訳

発行: 勁草書房　 1999年

「人類は呪術的な画像イメージの段階から、概念的思考が可能な文字テキストの時代を経て、150年前に「写真」という新しいメディアを得た。写真以後、映画、TV、コンピュータを含め、著者が称するところの「テクノ画像」（複製メディア）の時代へと突入する。このメディアは一見現実をそのまま捉えるかにみえるが、「装置」が介在し、制作、流通、受容の場を支配する。　脱産業社会／情報社会における人間の「自由」はどう得られるのか？文明論的考察。」

「書物復権」プロジェクトにより再版、第6版



ヴィレム・フルッサーとは

ヴィレム・フルッサーを知っていますか？（中日新聞夕刊2000年7月）

九十年代のドイツ語圏でブームを引き起こした思想家に、ヴィレム・フルッサーがいる。一九二十年にカフカと同じプラハのユダヤ人地区で生まれたフルッサーは、ナチスの手を逃れてブラジルに亡命し、ジャーナリストや哲学教授として活躍した後、七十年代になって約半世紀ぶりに再びヨーロッパに戻った。

「プラハの春」を圧殺されたばかりのチェコには帰れない彼は、イタリアやフランスに居を定めたが、注目を集めるようになったのはむしろドイツ語圏の国際会議であった。ユニークな切り口の文明論・メディア理論とその独特の風貌や話術はどの会議でも聴衆を熱狂させ、若者たちや芸術家たちを中心にカルト的な人気を集めるようになっていったのである。

彼のドイツにおける最初の著作は『写真の哲学のために』（一九八三年、日本語版は深川雅文訳、勁草書房）である。その後八十年代のいくつかの著作を通して彼の人気は高まっていったが、ジャーナリスティックな注目は集めるものの、アカデミズムの世界ではそのいかがわしさに眉をひそめる向きも多かった。

事態が変化したのは、彼の突然の事故死以降のことである。一九九一年、ベルリンの壁が崩れ、講演旅行のために初めて故郷プラハに里帰りしたフルッサーは自動車事故に遭遇し、その激動の生涯を自らの生まれた都市で終えることになる。そして、その後出版された『サブジェクトからプロジェクトへ』（一九九四年、日本語版は村上淳一訳、東京大学出版会）、『テクノコードの誕生』（一九九六年、日本語版は村上淳一訳、東京大学出版会）をはじめとする著作群、著作集は思想界・哲学界に新たな衝撃を与え、ドイツや東欧を中心に一大ブームを引き起こすまでになったのだ。

ドイツ語圏では現在、キットラーやボルツらのメディア哲学が注目を集めている。だが、フルッサーがこれらの思想家達と異なっているのは、何よりもその理論的スケールの大きさであろう。文明を組織する支配的文化コード（記号体系）を「画像―文字テクスト―テクノ画像」への数千年単位での推移として捉え、前近代、近代、ポスト近代を「道具―機械―装置」といった概念群で明快に説明する彼のメディア哲学は、人間のコミュニケーションの根底を見据えた、眼の覚めるような説得力をもっている。そして、それは現代の情報社会を読み解く上で、他の思想家からは得られないオリジナルで強力な視点や概念装置を提供してくれているのである。

日本で初めてのフルッサーに関する国際シンポジウム「未来を考える―デジタル社会の思想、ヴィレム・フルッサーのコミュニケーション論とともに」が去る五月二十六、二十七日の両日、赤坂の日独文化センターで開かれた。ここには、ドイツからアンドレアス・ミューラー＝ポーレ、ディルク・マテヨフスキー、フランスからマルク・ギヨーム、日本からは深川雅文、村上淳一の二人の翻訳者のほか、多木浩二、港千尋、奥出直人、藤幡正樹、室井らが参加して、熱い議論を繰り広げた。しかしながら、むしろここでの議論はフルッサー理論のまだまだ解き明かされない未知の可能性を予感させるものであるように感じられた。まだ、時代はフルッサーに追いついていない。その意味で彼はまさしく二十一世紀の思想家なのである。　※「フルッサー・シンポジウム」シンポジウム　2000年5月26日と5月27日、東京ドイツ文化センターで開催

4.視覚文化論Ⅰ (前期) ヴィジュアル・カルチャーとテクノロジー　その歴史と未来への旅　講義内容

科目区分	関連科目	履修区分	自由選択
授業形態	講義	単位数	1
授業科目名	視覚文化論Ⅰ ヴィジュアル・カルチャーとテクノロジー　その歴史と未来への旅		
担当教員	深川 雅文		
開講期間	前期	曜日・時限	月・7
開講学科	写真芸術第二学科	標準履修年次	1,2
必要先修科目	-	特記事項	-

授業目的	写真が拠って立つ人類の映像文化のルーツを歴史的に展望し、現代の映像環境の理解を深めるとともに映像のリテラシー能力を高め、映像文化への批判的分析眼を身につけること。	
到達目標	視覚文化論Ⅰでは、写真などテクノ画像が浸透した私たちの生活文化の根源とその成り立ちを、人類史における画像誕生のプロセス並びにそのダイナミックな歴史的展開を追うことで展望します。その事象を、画像の芸術的展開と社会的展開と、その過程を促したテクノロジーの展開とともに紹介していきます。過去から現在まで（洞窟壁画から iPhone まで）、歴史的な視覚芸術の代表的な作品や関連する芸術運動ならびに社会的事象を具体的に映像資料で紹介しながら講義を進めます。私たち人間の自己形成と世界観に深く浸透し、影響している映像文化とテクノロジーの本質を捉え、考える力を身につけてもらいたいと思います。また、メディアの歴史の中で、写真というメディアが人類にとっていかに大きな革命であったのかということを自覚することで、「写真とは何か」という問いに向かい合える視座を培います。	
授業計画	1	イントロダクション　「人間への問い」から「視覚文化とテクノロジーへの問い」へ
	2	画像の原点　洞窟壁画の誕生
	3	テクストの原点　文字の誕生と言語の起源
	4	活版印刷術の発明　グーテンベルクの銀河系のビッグバン
	5	遠近画法の発明　ルネサンス絵画の精華
	6	リトグラフの発明　19 世紀・マルチメディアの革新
	7	写真の発明　視覚文化の第一革命　1
	8	写真の発明　視覚文化の第一革命　2
	9	映画の発明　視覚文化の第二革命
	10	ハーフトーン印刷の発明　20 世紀・マルチメディアの革新
	11	20 世紀　アート & メディアの展開
	12	21 世紀　デジタル革命へ
授業の方法	授業テクストに沿って、プロジェクターにより、様々な画像・動画資料 (写真、映画、ビデオ、YouTube 等) の投影を行い、見ながら説明し、論を進めます。授業の全テクストは、pdf データとして参加者に配布します。	
成績評価の方法	1. 授業に対する積極性 (30%)、2. 授業中の小課題 (1 回)(20%)、3. 最終のレポート (50%) の三つで判断します。	
教科書	授業計画に沿った「視覚文化論Ⅰ　ヴィジュアルカルチャーとテクノロジー」のテクストを PDF で配布します。	
参考書	深川雅文 著書『光のプロジェクト　写真、モダニズムを超えて』(青弓社) 深川雅文 訳書『写真の哲学のために』(ヴィレム・フルッサー著　勁草書房) 共著 (後藤・港・深川)『現代写真アート原論《コンテンポラリーアートとしての写真》の進化形へ』(フィルムアート社 2019)	
備考	-	

科目区分	関連科目	履修区分	自由選択
授業形態	講義	単位数	1
授業科目名	視覚文化論Ⅱ アート & テクノロジー		
担当教員	深川 雅文		
開講期間	後期	曜日・時限	月・7
開講学科	写真芸術第二学科	標準履修年次	1,2
必要先修科目	-	特記事項	-

授業目的	写真が拠って立つ近現代の芸術文化のルーツを歴史的に展望し、アートと写真との関係についての理解を深め、現代の美術と写真に関する批判的分析眼を身につけること。テクノ画像としての写真の新たなビジョンを獲得すること。	
到達目標	視覚文化論Ⅱでは、アートと写真との関係を、芸術の革新がドラスティックに進んだ 20 世紀モダニズムの主要な「芸術運動」ないし「イズム (主義)」の中でいかなる展開を見たのかを追跡することで展望します。例えば、未来派、キュビスム、ダダ、シュルレアリスム、構成主義、新即物主義、実験映画、バウハウス、さらに第三帝国 (ナチズム) 等々…20 世紀前半の芸術を彩る様々な芸術のイズム (主義) は、写真の芸術的な展開と深く結びついており、アートと写真の関わりを理解し考える上で基礎的かつ重要な知見となります。こうした 20 世紀の芸術運動の代表的な作家や作品、並び関連する写真・映像作品を具体的に映像資料で紹介しながら講義を進めます。今日の芸術の直接の出発点となったモダニズム芸術運動のあり方を理解することで、「写真とアートの関係とは何か ?」という根本的な問いに向き合い、現代におけるアートと写真を考える批評的な視座を培います。	
授業計画	1	序論　20 世紀、前衛芸術のビッグバン
	2	芸術の実験と革新　さまざまな「イズム (主義)」/ リシツキーの『クンストイスメン』
	3	未来派 —スピードの美学— / 未来派フォトディナミスモ
	4	ダダ / シュルレアリスム　— 芸術の否定 & 無意識からの創造— / ダダの誕生と展開、デュシャンの挑発、マン・レイの実験
	5	キュビスム　—遠近法の脱構築— / ピカソ、ブラックの衝撃
	6	構成主義　—芸術と社会の革命— / ロトチェンコ、マレーヴィチの実験
	7	実験映画　—映画芸術の可能性— / エゲリング、リヒター、エイゼンシュテイン
	8	写真、ニュー・メディアの発見　/ モホイ = ナジの写真と映像の実験
	9	バウハウス　—芸術教育の革命と実験—
	10	バウハウス　—アートとテクノロジーの統一へ—
	11	第三帝国 (ナチズム) のアート　/ 退廃芸術展、リーフェンシュタールの映画美学、モダニズムの変容
	12	テクノ画像の宇宙を超えて　(総論)
授業の方法	授業テクストに沿って、プロジェクターにより、様々な画像・動画資料 (写真、映画、ビデオ、YouTube 等) の投影を行い、見ながら説明し、論を進めます。授業の全テクストは、pdf データとして参加者に配布します。	
成績評価の方法	1. 授業に対する積極性 (30%)、2. 授業中の小課題 (1 回)(20%)、3. 最終のレポート (50%) の三つで判断します。	
教科書	授業計画に沿った「視覚文化論Ⅱ アート & テクノロジー」のテクストを PDF で配布します。	
参考書	深川雅文 著書『光のプロジェクト　写真、モダニズムを超えて』(青弓社) 深川雅文 訳書『写真の哲学のために』(ヴィレム・フルッサー著　勁草書房) 共著 (後藤・港・深川)『現代写真アート原論《コンテンポラリーアートとしての写真》の進化形へ』(フィルムアート社 2019) 飯沢耕太郎監修『世界写真史』(美術出版社)〔深川雅文執筆　第 3 章「近代写真の成立」〕 高階秀爾監修『西洋美術史』(美術出版社) 末永照和監修『20 世紀の美術』(美術出版社)	
備考	-	

●本講義のメッセージ

《写真とは何か? ⇄ 人間とは何か?》

写真を産んだメディアの歴史を辿ることは、人間の本質に迫ることである。 新たなメディアの登場とその変化、相互の影響を見ることで、人間の存在のあり方を見ることができる。

メディアの歴史の中で写真を捉え直すことは、人間の文化史の革命の本質を理解する上で欠かせない。メディアはメッセージである。写真のメッセージは何だったのか?人類の重要なメディア史の発展を旅しながら、見ていきましょう。

深川雅文

最後に

前期の講義、みなさんと一緒に楽しみながら進めたいと思っています。
よろしくお願いします。

深川雅文

分からないこと、尋ねたいことなどありましたら遠慮なくご連絡ください。
E-mail: mfukagawa@mac.com

公式ウェブサイト: Art&Article. https://www.mfukagawa.com/

以上